明治の佐伯三青年　(17)

―― 龍渓・鳴鶴・鶴谷 ――

御手洗　一　而
（賛助会員・川越市小堤）

自衛協会

鹿児島の暴動は、二月五日の第一報に続いて、二月九日、県一等属渋谷彦助によって第二報が東京へ伝えられたが、西郷は姿を隠し、消息がわからないと報じている。大警視川路はこの情報をでっちあげととり、岩倉は「大事正ニ決セリ」と受けとめたが、大久保は当初この情報を問題にしていなかった。

そのため、政府は事情を視察するため川村海軍大輔と林友幸内務少輔を鹿児島に派遣したが、海路をとった川村等は、西郷との会見はおろか、上陸さえ出来ず、船中で大山県令と会っただけで引揚げざるを得なかった。そして十二日に尾道から「大山県令と船中で会せりと雖も到底鎮定すること困難なり」という電報を山県陸軍卿に送った。この報告を受けた大久保は、こゝで始めて事の重大さに気づき、急遽横浜から玄武丸に投じ、十六日神戸着、伊藤、川村と会って情報を聞き、その夜汽車で京都入りした。

この頃は、岩倉、大久保にしても、私学党暴発と西郷の挙動とは分離して考え、またそう念じていた。そのため翌十七日には、勅使派遣まで決議していたが、十八日になって、谷熊本鎮台司令官から「西郷立つ」との電報により、勅使派遣は中止となり、十九日鹿児島征討令発令となった。たゞし、西郷以下の官位剥奪が

二十五日になっているところをみると、政府はまだ西郷挙兵について半信半疑だったのかもしれない。

政府がこの暴挙を確信したのは、二十二日、長崎県令からの電報であった。

「サイゴウ、キリノ、ミヅカラ、ヘイヲ、ヒキイテ、ヒウガ、ヂニ、イデタリ、ヒゴジエハ、シノワラ、ムラタ、ナリ」

これが西郷挙兵の確報となった。

二月五日以来、「西郷立つ」と確認するまで、政府でさえも二週間以上かゝっている。各新聞社が混乱したのはいうまでもない。新聞社には次々に断片的なニュースは入ってきても、全体像がつかめないのが実状であった。この時期に、新聞社でもっとも早く動いたのは「東京日日」の福地源一郎（桜痴）であった。もともと「東日」は、明治七年四月の台湾征討に際して、岸田吟香（当時主筆）を従軍記者として送り込んだ前歴がある。岸田の「台湾信報」は、当時人々から競って読まれ、独壇場として紙価を高からしめたものである。福地はいち早く政府の動きを察知して京阪に下り、伊藤の許可を得て現地に向かっていた。

郵便報知にもいろいろな情報が舞いこみ、人の出入りだけが多くなった。矢野や藤田は、過激新聞の元記者達や、金欲しさで群がる壮士達の情報には耳をかさなかったが、沼間に会ってから、私学校党の襲撃事件を確かめるに至った。

それ以来矢野は、しばらくの間記者の本業よりも政治的な動き方を始めることになる。

元来矢野や沼間等の主張は、薩長の専制政府に反発して、民選議院を設立することにある。そのため、「西郷立つ」の事件が、大局的に何かの変化をもたらすのではないかという期待があった。矢野は日頃の持論をもちかけるため、早速池の端の沼間の家を訪れた。

沼間は官人でありながら、明治六年に法律講習会をつくって演説討論の練習をしたり、堂々と政府の政策を批判する変り種である。

矢野は沼間を前にして自分の考えを述べた。

「沼間さん。もし西郷が馬関を越えて東上するようになれば、天下の大乱になる。このまゝ手をこまねいてじっと見ているわけにはいくまいと思う」

「それはそうだが、だからといって何か案でもあるのか」
矢野は膝を乗り出した。
「これは洋書で読んだドイツのハンブルグの話ですが」
矢野がこゝまで話すと、沼間の方が先をとった。
「東京を自治の自由都市にするという計画であろう」
沼間はすでに周知していたが腕を組み直した。
「それも一つの案である。しかし、全国に火の手が上がればなんの保証もないぞ。あるのは力だけだよ。一発の暴発が何万発に変るのはわけはないんだよ。それよりも一挙に前進あるのみだ」
「一挙に前進と言いますと」
矢野は問い返した。
「俺の考えはなあ。どうせ天下が麻の如く乱れてくれば、今度こそ収拾がつかなくなる。その時は全国に檄をとばし、勿論西郷にも説いて、全国各地から名代を出して代議政体を開く。この眼目はどうじゃ」
沼間の眼がきらりと光った。
矢野に異論のあろうはずはない。沼間の代議政体論も結局は矢野の望む民選議院設立に通じるものである。沼間は更に続けた。
「そのために、一つの拠点として、東京を自衛の都市にすることには大賛成だ」
こうして、手段方法は違っても、自由都市の構想で意見が一致すると、二人は同志を募ることにした。
「福沢さんにも話してみましょう。他に名の通った人はいませんか」
矢野は、手当り次第に口説く構えでいた。
沼間が同じ元老院仲間の陸奥の名前をあげたのは、のちになれば因縁めいた話であるが、よく陸奥を知っていたといえる。
「いるいる。陸奥だよ、陸奥宗光。あ奴なら謀叛気がある」
沼間はこう言って天井に眼をやった。
沼間は板垣の勧めで、維新後土佐藩の洋式訓練を頼まれたことがあり、陸奥は紀州藩出身ながら、長崎で坂本龍馬に見出され、土佐人とは深いつながりをもっていた。こんな関係から沼間は陸奥の性格まで知りぬいていたが、この時期、陸奥は陸奥でとてつもないことを考えていた。

矢野は二月十六日の報知社説で、人民は戦乱の波及を防止するため、「自衛の盟社」を結ぶよう力説した。一方、恩師の福沢を訪ねて、その主旨を説明した。福沢は、さきの新聞条例や讒謗律さえも避けて通るふうで、こんな運動に共鳴するはずがないことは、矢野自身が一番よく知っていたが、結局同意は得られなかった。

続いて矢野は陸奥の説得にかゝった。

これも不成功に終ったが、矢野の頭には、この時の会談の内容が妙に頭にこびりついていた。

「他言しては困るが、政府はまだ悲観してはいないぞ。政府が弱れば局面は面白くなるが、政府はまだまだ楽観している。そのうちあっと言わせてみせる」

矢野は陸奥のこの言葉が妙に気になっていた。それもそのはず、この時陸奥は、土佐派の大江卓や林有造らと共謀して、大阪襲撃や木戸・大久保等の暗殺を計画中であったからたゞ者ではない。

それでも二人は、二、三十人の有志を京橋の一隅に集めて、「自衛協会」を発足させた。その夜、同志の演説や自由討論は、夜を徹して行なわれた。

翌日、矢野は再び沼間を訪ね、開口一番、前夜きわ立って目立った青年について問うた。

「沼間さん。あの弁のたつ青年は誰ですか」

「奴か。あれが島田三郎というてな、将来一番見込みのある奴だよ」

沼間は事もなげに言ったが、矢野はこの時始めて島田三郎を知った。

それから矢野は沼間に新情報を伝えた。

「ところで沼間さん。西郷が熊本に入ったと聞きましたが、熊本城を守る谷司令とは一体どんな人物ですか」

矢野はその方が知りたかった。そして、土佐藩出身の谷のことは沼間がよく知っていると思った。

「谷か、頑固な奴だが、じっとしていないところは野戦向きかな」

「野戦向き！」

矢野は問い返した。

（出ては危ない）

矢野は反問しながら突嗟にそう思った。

「沼間さん。城を出ては危ない。籠城して援軍を待つべきだ。長びけば長びくほど西郷も容易でなくなる。

谷が野戦に躍り出て一蹴されたら、九州は一たまりもない。谷が城の外に出るか出ないかが問題じゃ」
沼間は苦笑していた。
「なんだおまえ、馬鹿に政府に味方するではないか」
矢野も苦笑した。
「いや、そうではない。熊本城がもつかもたないかで、われわれの行動を急がねばならぬ」
矢野は自由都市の構想で頭の中が一杯であった。
「大丈夫。谷は城を出る。まちがいない」
沼間は珍しく気色ばんで念をおし、自衛協会の行動開始を促すふうであった。沼間はあくまでも熊本城は西郷軍に一蹴され、乱世の再現から代議政体論を夢見ていた。
しかし、その後矢野が報知社で得た情報は、「チンダイハシロニヨツテボウセンニケツシタ」旨の電報であった。
矢野は電報を手にすると、真っ直ぐに沼間宅へ駆けつけた。
沼間は、「こんな筈ではなかったが…」と頭を掻いたが、これから先の形勢については、暫く様子を見るより仕方がなかった。
後日、熊本城の攻防戦は一進一退を続けながらも、政府軍の力は意外に強く、西郷軍の敗退とともに、自衛協会の計画も自然消滅の形で立ち消えになった。
だが、この運動計画が政府当局に知られないはずがない。当然、矢野と沼間の名は、要注意人物としてブラックリストに載ったが、官人の沼間は、この一件が災となって、元老院をやめざるを得なくなった。

次号原稿〆切
八月三十一日